

道化童子

illust: えいな

他人の代表

<http://www.tanin.jp/>

絶対に笑っては
いけない王国



次の日の昼時、ようやく隣国エンマール王国に到着した。

ここは僕たちの来たラウルス王国とほぼ同じくらい、ほんの少し小さいくらい国だ。

「コナットさん、この国の宮廷楽師になりましようよ！」

開口一番そんなことを言うフュロス。

「いや、そう簡単になれるわけじゃないからね？」

「でも、ラウルスでは宮廷楽師でしたよ？ 実力はありますよね？」

「いや、違うからね？」

フュロスの場合本気で理解していないから、突っ込むわけにもいかない。

僕だつてなれるものならなりたくないさ、宮廷楽師。

「あのね？ 僕がラウルスで宮廷楽師になれたのは、父さんがいたからなんだよ。僕単体じゃ、そう簡単に見向きもしてもらえないんだよ」

僕は自分の音楽に自信がないわけじゃない。

正直この歳で、ここまで演奏できる人はそうそういないだろう。

だけど、全年代の音楽家の中に入れば、僕らの実力の人間は山ほどいるだろう。

そんな中、何のつてもないのに、僕は音楽に自信があるから宮廷楽師にしてください、なんて言いに行っても、まず取り合ってもらえないだろう。だって、僕の身分は誰にも保証されていないから、そんな得体のしれない者を王宮に上げて、もし僕が暗殺者だったら、いくらでも王族を殺せてしまおう。

だから、まず王宮に入ることすら、かなり時間もかかるだろう。

「じゃあ、私たちの生活はどうなるんですかっ！」

「いや、こうなるの分かっつてついてきたんだよね？」

「責任を取ってください！」

「人の話を聞いてくれるかな？」

「せーきーにーんー！」

「落ち着けて、みんな見てるから！」

ここはもう人の少ない街道じゃない。

周囲には多くはないが人が行きかっつているし、静かな町でいきなり女の子が騒ぎ出したので、何かがこちらを見ている。

「責任は結婚でいいです！ 貧しくも幸せに暮らしましょう！」

「あー……まあ、さ。僕の演奏とフュロスの踊りだけで生活費くらい集められるからさ。しばらくそうやって地に足を付けて生きて行こうかと思ってるんだけど」

「夫婦で稼ぐんですね？」

「いや、結婚はしないけどさ」

「どうしてですか！」

いや、逆にどうしてそんなわけが分からない、みたいな顔をするのが分からないんだけど。

「まあまあ、昨日は夕食も携帯食だし、朝ご飯も食べてないから、どこかで食事をして考えようよ」

このまま、結婚する、しないの話になるといつものように長引くから、僕は話題を変えることにした。

「考えるんですね？ 誤魔化さないですね!!? 分かりました、行きましよう！」

フュロスは僕の手を引く張つて当てもないのに走り出す。

僕は、やれやれ、とついていった。

フュロスが適当に入った酒場は、既に賑わっていて、昼間からお酒を飲んでたらだと話をし

ている親父さん達が、いくつものテーブルで酒とつまみを口にしていた。

「マスター、食事いいかい？」

「いいよ、いらっしやい」

こういうところは、場所によっては夜にしか食事を出さないところもある。

王族でもない限り食事なんて朝夜のみだから、昼間に食事を用意しても売れないし、無駄に食物を腐らせるだけだ。

だけど、街道上にある街には、旅の者が寄つたりするから必ずいつでも食事を出す店もある。

ここはそうだったようだ。

「はいよ、これがメニューだ」

渡されたメニューを見ると、普通にオーガ焼きとかあつて、困る。

あれ食べるのか、と汗が流れる。

「じゃあ、僕は鶏の丸焼きをもらおうかな。あとパンと果実のジュースを」

さすがにオーガは勘弁していただきたい。

「じゃあ、私は……オーガ焼き！」

「は？」

僕の横からメニューを覗き込んだフュロスが

元氣よくそう言うのを、僕は呆然と聞いていた。

「あと、パンとスープを」

「いやフュロス、オーガ食べるの?」

「え? 駄目ですか? そんなに高くないって

思ったけど……」

「いや、値段じゃないよね?」

フュロスは本当にわからない、という表情をする。

「……もういいよ、じっくり食べればいいよ」

僕はそれ以上を諦め、自由にさせてあげた。

「私はオーガの心臓煮込みと——」

「は!?!」

それ以上にとんでもないことを言い出したのは、レイナムさんだ。

「あと、オーガの睾丸揚げをもらおうか。あと、

麦を蒸したものを」

「……………」

僕の想像のはるか上空を行く注文に、僕はもう、何も言えなくなつた。

フュロスといい、レイナムさんといい、女の子つてのはなんでこう豪胆なんだろう?

昨日目の前で襲われたばかりじゃん!

思いつきりショートソードで切られて血しぶきを上げて死ぬのを見たばかりじゃん!

何で平気なの?

何で食べるの?

「ねえ、何で二人ともオーガを食べようって思ったの?」

「え? 珍しいから?」

「そうだな。私も食べたことはない。だが、とても滋養強壮にいいと言われている。それがこの値段で食べられるのなら安いと思っただけだ」

そりゃあ、街の外にいっぱいいるからね?

人に害をなすし、殺して捨てるくらいなら激安

で売った方が儲かるよね?

だけども、昨日襲われたつてもあるけどさ、それ以前に多少は知能のある、人型の魔物をよく

食べようと思っただけ?

しかも、レイナムさんに至っては、玉だから

ね? おきやんたま 睾丸だからね?

この人、これからあのオーガの玉を食べるんだよ?

怖いよ! 無表情だと思つて油断したけど、や

つぱり怖いよ！

僕は次々に運ばれてくる食事を眺めながら、戦慄していた。

「ところで、前から気になってたんですけど」

フュロスが口を開く。

うん、黙って食事を待っているよりも話をした方がいいよ。

「レイナムさんはいつも戦う時にはショートソード使いますよね？ それならどうしていつもロングソード背負ってるんですか？」

レイナムさんの特徴と言えば、見た目の美しさやスレンダーな長身、長いストレートの黒髪など、いくらでも挙げられるけれど、一番の特徴がそのフェミニンなワンピースに似つかわしくないシルバーの胸当てと、いつも背中に背負っているロングソードの二点だろうか。

レイナムさんは、街を歩けば男たちが言い寄ってきたようなほどの美しさはあるんだけど、胸当ては、まあ、ギリギリ旅行者の護身つて思われるかもしれないけど、ロングソードはなんだか妙な威圧感があり、ボディーガードとしては成功しているけど、その魅力を半減させているようにも思え

る。

「それは、私の腕力では、ロングソードは手に余るからだ」

「……そうですか」

多分、色々突っ込みたかつたんだろうけど、フュロスは言葉を飲み込んだ。

レイナムさんは決して貧弱でないし、純粹に戦ったら、まず僕は負ける。

だけど、ロングソードを振り回し、長時間戦うことは出来ない。

それは筋肉の質の問題だ。

レイナムさんは腕力にものを言わせる戦い方じゃない。

素早さと正確さで、確実に相手を倒し、自分の護衛対象を護る。

それがレイナムさんの戦闘スタイルだ。

多分フュロスは、「じゃあ、どうして使わないロングソードをいつも大事そうに背負っているんですか？」つて聞きたかつたんじゃないかと思うけど、それは失礼だと思っただろう。

まあ、あれは僕の父さんが彼女を僕のボディーガードにした時に「我が息子のために」と手渡し

た物だ。

「父さんがいかに息子に過保護かという面がよく分かって、僕としては恥ずかしいけど、まあ、だから、レイナムさんはいまだに使わないロングソードを大切に背負っているんだ。」

その気持ちは本当にありがたい。

「だけど、僕としてもそんな恥ずかしいエピソードを、家族に近い仲間とはいえ歳下のフュロスには言いたくない。」

「何より、僕のせいでレイナムさんの魅力が半減しているという事実を、フュロスに知られたくないんだよ。」

「はい、お待たせ、これがオーガの睾丸揚げで最後ね。」

店員の若い女性が最後のメニュー、レイナムさんの注文したオーガの睾丸揚げを持ってきたところで注文が全て揃う。

「はい、ありがとうございます。じゃ、食べようか。」

「いただきますー！」

「朝も食わず、お腹が減っていた僕たちは、早速食べ始めた。」

「おいしい！」

「え？」

「うむ、思った以上に味が濃厚だ、これはいける」僕の周囲の二人の女性は、オーガの肉をおいしいように食べている。

いやさ、オーガって人食い鬼だよ？

その肉の大半は人肉を食らって太ったんだよ？

何でそうおいしそうに食べられるかな。

いや、僕の鶏の丸焼きだっっておいしそうだよ？

おいしいよ？

香味入れて焼いてるから、こんな場末でも結構本格的だよ？

「おいしい！」

僕は一口食べてこれ見よがしにそう言った。

「この煮込みは濃厚に煮込んであるから、血の匂いもしない」

「えー、私もそれにすればよかったです。これもおいしいですけど！」

僕の言葉はあっさり無視されました。

もういいよ、好きに食べればいいよ。

まあさ、確かに、鶏の丸焼きはさ、王宮の晩餐

会でも出たし、それに比べたら貧相な味だけどさ。家でも王宮でも、オーガなんて出ないけどさ。おいしいものはおいしいんだよ？ だって僕、鶏好きだもん。

僕は拗ねて一人で食べていた。

が、僕もそうだけど、フユロスもレイナムさんも朝を抜いてるからお腹が減ってて、結構食が早い。

まあ、僕は鶏だから、大きくもないし、レイナムさんは見た目上品そうだが慣れているのか、食べるのは早い。

が、フユロスだけは元々そんなに食は早くないし、だけど早く腹を満たしたいのか急いで食べていた。

別に慌てなくても誰も取らないし、急いでるわけでもないからゆっくりでいいんだけど。

そう注意してやろうと思ったその時。

「！ むぐっ！ けほっ、けほっ！」

喉が詰まったのかフユロスがせき込んだ。

その際、その小さな鼻から、勢いよくオーガの肉が飛び出してきた。

「ふっ……ふふふ……」

可愛い顔をした女の子が、鼻からオーガの肉を吹き出す、ということだけで笑えるのに、その時のフユロスの顔が間抜けで、しかも何とか取り繕おうとしているので、あまりにも面白かったので、僕は思わず吹き出してしまった。

何とか僕は口の中のものを飲み込んだので、文字通りの「吹き出し」にはならなかったけれど。

「な、何ですか！ 人が苦しんだるときに！」

「いや、ごめん……ははは、あまりにも、急いでおかしかったから……」

僕は笑いが止まらず、話しながらも笑っていた。ん？

僕らのまあ、それなりに面白い雰囲気の中、周囲が僕たちを見て、凍り付いていた。

え？ な、何……？

ででーん、コナット、アウト

「……へ？」

どこからともなく聞こえてくるそんな音と声。どうして僕の名前を知っているんだろう？

そんな疑問が僕の頭をよぎった時

「てっ！」

僕の尻に激痛が走る。

誰かが叩いたのかと振り返っても誰もいない。

さっきの声も、酒場の誰かが言ったようにも思えない。

何が起こったの、今？

「？ どうしたんですか？」

不思議そうに僕に聞くフユロスと、警戒するレイナムさん。

「分らない、いきなり尻に激痛が走ったんだ」

「それは、私を笑った罰ですね。いい気味です」

平然と食事を続けるフユロス。

いや、お前何も関係ないだろ。

さっきのは一体何だろう？

……もしかして、僕が笑ったのに関係あるのかな？

うーん……試してみよう。

「なあ、フユロス」

「何ですか？ 私はまだ食事ちゅ……あははははははっ！」

僕は、普段したことのない変顔をして、フユロスに見せた。

フユロスはそれがあまりにも不意打ちだったため、笑ってしまった。

「何ですかっ！ いきなり笑わせないでくださいっ！」

「いや、ごめん、ちよつと試したいことがあってさ」

「試したいこと……？」

でーん、フユロス、アウト

「……へ？ いだっ!?」

僕の思った通り、変な声のあと、フユロスがびくんと身体を震わせ、そして尻を押さえた。

「いたたた……何ですか、これ？」

「どうも笑ったら攻撃されるようだね」

「……それが分かかって、私を笑わせたんですか？」

フユロスが恨みがましく僕を睨む。

「いや、笑いかどうか分らなかったからさ、試したんだ」

「同じです同罪です同衾です！」

「いや、同衾は違うからね？」

同衾って、一緒の布団で寝ることだよな。

「駄目です、罰として今夜は同衾です！」

「ところで、これって何なの？」

僕は同衾を迫るフェロスを流して、店員に聞く。

「あんたたち、旅人かい？」

「まあ、そんなようなものですが」

昨日から流浪の旅に出てるとか言い出すと長くなるからもう旅人って事にした。

「あれは、国王が国内に放っている精霊の仕業さ」

「精霊……？」

まあ、精霊の仕業なら何となく分かるけど、どうして国がそんなものを？

「まあ、そうだな、理解不明だろうな。僕だって意味が分からないからな」

僕の表情から疑問を読み取った店員が言う。

「元をたどれば、この国には王様と王妃がいて、この王妃が庶民出身だったんだが、美しい女性で、王様に見染められて結婚したんだ。で、王女が生まれたんだ。これもまた美しいらしいがな。だけど、王妃はまだ若いのに死んでしまっただけ」

まあ、よくある話だ。

美女ってのは薄命だからな。

「王様はそれからしばらくして再婚したんだけどさ、それが意に沿わないというか、体面上、いい年齢の王が独り身だと良くないってことで、説得させられて、好きでもない貴族の娘と結婚したらしいんだ」

これも、よくある話だ。

王女しかないとなると、世継ぎがないことになる。

だから、王子を生まないと、って話になるから再婚を勧められる。

更に、僕たちの目線から言えば、王には王妃がいて、だから、王妃を楽しませるために宮廷楽師や道化をはじめとした者たちが雇われる。

それで王も楽しむんだろうけど、王様が進んで自分のためにそういう娯楽を望んじゃ駄目だった風習があるみたいだ。

いやこれは単に僕の知識が芸術に偏ってるだけの話だけど、とにかくいい年齢の王が独身ってのは、異様なことらしい。

王様ってのは基本的に愛人も何人かいるのが普通で、それが本妻も愛人も一人もいないとなると、王だけの問題じゃなく、あの国は財政が厳し

いんじやないか、なんて言われたりもするし、国民としても世継ぎが少なくと不安に思ったりもする。

「で、その新しい王妃が嫁いだんだけどき、その人が自分が愛されてないのが何となく分かったんだよね。だから、王に寵愛されている死んだ王妃やその娘の王女に嫉妬して。その幼い王女を虐めてたんだ。王に気づかれぬように」

これは、よくはない話だろうが、王家でないならよく聞く話だ。

前妻の娘が継母に虐められる、なんて話は典型的だ。

「それで、王がそれを知ったのは数年後の事で、それがきっかけで離婚することになったんだけど、その時にはもう手遅れで、王女は元王妃の虐めに心まで蝕まれていたんだ。感情の全てを失い、笑うことも出来なくなっただ」

うん、何となく話が読めて来たぞ？

「……王女様、可哀そう……」

僕とは全く違う視点で話を聞いていたフュロスが王女に同情する。

「うん、王様もそう思ったみたいでさ。『王女が

笑えないのに国民が笑うとは何事だ』とか怒って、魔導師たちで特殊部隊を作って、精霊に独自の働きを与え、国に放ったんだ。それがあの精霊ってわけ」

「そうなんですか……」

いい話、同情すべき話に聞こえがちだが、それはただの王族のエゴに過ぎない。

「そう、だね……私たちだけが、笑っちゃ、駄目だよね……？」

だけど、こんなことを考える人もいるから成り立っているんだらう。

「フュロス、あのさ……」

「何……？」

なんか目が潤んでるフュロスに、これは国王の横暴に過ぎないと説明しようと思っただけど、誰が聞いているか分からない酒場でそんな話をしたら、通報されるかもしれない。

「私たちも、笑わないようにしましょう。ね？」

そんなことを言われると、僕は——。

「……ぷっ」

どうしても変顔をしたくなってしまっ。

いや、だつてさ、分かるかな！ 馬鹿馬鹿しい

ことに真面目になつてゐる人つて、ちよつとからかつてみたくなるよね？

でーん、フユロス、アウト

「ぎゃんっ！」

フユロスが身体を震わせる。

「何するんですかっ！」

「いや、何となくさ」

「何となくで人を笑わせるんですかっ！　これは暴力と同じなんですよ？　もう怒りましたっ！　これは仕返しですっ！」

フユロスが僕を笑わせようと変顔を試みる。

フユロスは元々が可愛いし、元踊り子アイドルつて事で

可愛い仕草することに洗練してるから、変顔をしてても微笑ましくて微笑むのが精々——。

「わはははははははっ！」

その変顔は衝撃的で、僕はつい爆笑してしまつた。

何それ、何で可愛い顔をそこまで変に出来るの？

元が可愛いからのギャップが激しくて思わず笑つてしまう。

でーん、コナット、シンズ、アマリ、アウト

「てっ！」

「痛っ！」

「うっ！」

フユロスの変顔は、たまたま周囲で見ていた人たちも見えてしまい、そのうち何人かが吹き出してしまったようだ。

「思い知りましたかっ！　これから私は怒るたびにこれで笑わせますよ？」

「いや、それは駄目だ、もうそれはこの国ではテロだよ？」

僕だけじゃなく、関係ない人たちまで巻き込んでるからね？

「まあ、悪かったよ。だけどさ、これに従つておとなしくしよう、なんて考えて欲しくはないんだ。もつと前向きになつて欲しい」

「どういう事ですか？」

「僕たちで、その王女を笑わせようつて事だよ」

王国にいる以上、しかも、懲罰精霊つてのがい
る以上、批判は避けた方がいい。

「でも、前向きな提案なら問題ないはずだ。」

「何で即答なんだよ？ 宮廷楽師になるより遙
かに簡単だろ？」

「コナットさんは人を笑わせることをなめてま
せんか？ そんなに簡単じゃない……ぷっ！

ちよっ、やめてくださいっ！」

「なんだか、偉そうに説教し始めたフュロスに変
顔で笑わせた。」

でてーん、フュロス、アウト

「たっ！ 何するんですかっ！」

「別に？ 人を笑わせるなんて簡単だつて言い
たかっただけだよ」

「……それだけのために、女の子を痛い目に遭わ
せるなんて！ もう許しません！ 仕返しです
っ！」

「なにをっ！ 受けて立ってやる！」

それから僕とフュロスの変顔攻防が始まった。

「あんたら、いい加減にしてくれ！ 周りの被害
を考えてくれっ！」

僕とフュロスの攻防は、周囲にも多大な被害を
与えた。

普段笑えない人たちの笑いの沸点はあまりに
も低く、見ないようにしても、僕たちが笑うとつ
られて笑ってしまうようだ。

「すみませんでした……」

「ごめんなさい」

自分達の争いに熱中してて、周りを見ていなか
った僕たちは素直に謝る。

正直、僕たちも笑って喰らいすぎて尻が痛くて
じんじんしてる。

「マスターたちは、痛いと分かっついてどうして
笑うのだ？」

この笑い地獄の中、平然と食事を終えたレイナ
ムさんが聞くけど、あなたがどうしてだよ？

とにかく、僕たちは騒ぎすぎた。

フュロスの言うように宮廷楽師はまあ、難しい
から、こうやって酒場を回って日銭を稼ぐことも
考えなきゃならないだろう。

そうなると酒場に入り浸っている彼らを敵に回すのはまずい。

「お詫びに、歌と踊りを提供します。フュロス、いい？」

「はい」

僕がリユートを取り出し、フュロスがマントを脱ぐ。

周囲のおっさんたちは僕の楽器なんて見向きもせず、バランスの取れたスタイルをしているフユロスの半裸姿に目を奪われている。

やれやれ、ま、相手がおっさんだし、これは仕方がないか。

フュロスはただ、見た目が綺麗なだけの女の子じゃないんだけど、それは、本人がこれから証明してくれるさ。

「いくよ？」

「うん」

フユロスの返事を待って、僕はリユートを弾き始める。

それに合わせてフュロスが踊り始める。

酒場のテーブルを軽く寄せただけの狭い場所。

だけど、フュロスは全ての立ち位置を計算して、

狭い場所でのびのびと踊る。

最初はその身体を好奇の目で見ていたおっさん達も、徐々にその踊りに魅了されていく。

清纯にして妖艶。

高貴にして低俗。

清廉にして媚欲。

とても十六歳の女の子の踊りとは思えない。

そして、誰も言葉を発せなくなった。

その時。

「……む？」

ケイラームの神託書が光っている？

どうしてこんな時に？

女神ケイラームは、昨日も言ったが、とても空気の読める神で、僕たちがピンチの時にだけ、神託を残してくれる。

今この瞬間、僕たちは特にピンチでも何でもないんだけど……。

「レイナムさん、お願いしていいですか？」

「承知した」

僕はレイナムさんに神託書を読んでもらうようお願いした。

「何々……『フユロスの超変顔が戻らない』だ

と？」

「……え？」

なんだそれ？ 超変顔ってなんだ？

さっきのフュロスの変顔だけでも相当なのに、あれ以上って事か？

僕は演奏を止めずに、フュロスも踊りを止めずに、これ、どういう事だろう、なんて考えていた。

ふと、フュロスがターンして一回転した時、その顔を見てしまった。

「わははははははっ！」

僕は、爆笑してしまった。

フュロスの顔が、さっきの変顔の数倍くらいに鋭さと際どさになっていたのだ。

そんな変な顔で、なんか、妖艶に踊ってるんだよ？

それはもう、爆笑ものだよ！ 笑わないことなんて出来ないよ！

あまりの事に、僕はリュートを落としそうになり、演奏が止まる。

でーん、コナット、アウト

「てっ！」

「え？ 何ですか？」

「来るなっ！ ……わははははっ！」

でーん、コナット、エメル、ライケル、キュコ、サマル……、アウト

酒場内が爆笑に包まれ、精霊大忙しとなった。

「え？ え？ ……ええええええっ!？」

フュロスはやっと自分が変顔をしていることに気づいたようだ。

「どうしましょう！ これ、戻せませんっ！」

「だから、こっち来るなって！ わははははははっ！」

でーん、コナット、アウト

「戻せないんですよっ！ 一生このままだったらどうしましょう！」

半泣きのフュロスが顔を寄せてくるけれど、僕には凶器が迫って来ているようにしか見えない。

「わはははははは……ちよっと！ 本当にごめ



絶対笑ってはいけない王国

コミックマーケット90
14日日曜日東館パ13b「他人の代表」
<http://tanin.jp>